
ホシノソラ Mirror set against each other

W__OSSINO

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホシノソラ Mirror set against each other

【Nコード】

N1598Z

【作者名】

WLOSSINO

【あらすじ】

駅前で道に迷った少女と出会う主人公。人の良い男は、良く知らない少女の道案内をする事になるが…

僕が大学に行こうとすると制服を着た少女が立っていた。

駅前には必ずある、周辺の地図が描かれた看板の前に。

大人びた容姿からしておそらく高校生、中学生という事はないはずだ。

黒い冬服のセーラー服に赤いスカーフ、そして同じ色のストッキング。

少女は、その前で何度も何度も首をかしげる。

道が解らないのだろう。

拳句の果てには、地図を様々な角度から見はじめた。

しゃがみこみ下から見上げたり。右から覗き込んだり、逆から見たり。

だが地図とは変面に描かれた絵であり、立体ではないので角度をいくら変えようが迷い人の行く先を示してくれることはない。

僕は少女のそんな様子を見かねて話しかけた。

「ねえ君、行きたいところあるの？」

「……………」

首をこちらに向けて回し、僕をジーツと見つめる。

きれいな瞳だった。人形の顔にはめるために造られたガラス玉のように。

変な間があく。

話しかけたのは失敗だったかもしれない。

僕の勝手なおっせかいだったのだ。

それを感じた僕は、

「えーっと、余計なお世話だったかな」と言う。

だが彼女は「実は雨宮大学に行きたいのですけど」と目的の場所を僕に説明。

勘違いだったのだろうか。

「ああ、それだったら簡単だ。目の前にあるこの道をまっすぐ行けばいいよ」

「まっすぐですって……はあ？」

いぶかしげな顔で僕を見つめる。

「!？」

「……………」

「……………」

少女の顔は不細工ではなかった。

が、今の顔は見れたものではない。

口を歪ませ、眉間にしわを寄せ、左の眉をつり上げている。

ひと昔前のヤンキーのような顔、要は不細工な顔をしていた。

何だその顔は、何が気に入らないんだ。僕が嘘をついているとも言うのか。

親切で話しかけてあげたのにとんだ仕打ち。やはり、なれないことはするものではない。

しかし、一度乗りかかった船は簡単には降りられない。

「……ハハハ。良かったら案内しようか、僕の通ってる大学だし」
たぶん僕の顔は、すごく引きつっている。

それを聞いた少女は、

「あー、雨大の学生さんでしたか。これは失礼しました」

ニコツと笑って返答。

なんとなくだけど、閉じられたまぶたの奥の目は笑ってないような気がした。

作り物の笑顔。

たぶん気のせいだろうけど。

雨大とは、僕の通ってる大学である雨宮大学の略である。

「ハハハ…」

なんで彼女はあんなしかめっ面をしたのだろっ、ナンパされなくても思ったのか。

女子高生に自己紹介をされた。

「私は雨宮星空と言います。天の星、空と書いてソラと読みます。ヨロシク」

「僕は鈴木だよ。よろしくね」

それを聞いた星空の顔が一瞬、また不機嫌なものになる。

「下の名前は？」

「えッ、なんで」

「教えて下さい。私は教えたのに不公平」

僕が名前を言わなかったのが気に入らなかったようだ。

あまり言いたくないからわざと名前を伏せたのに、なんて空気の読めないヤツ。

僕は自分の名前にあまり良い思い出がなかった。

「…聖夜」

聞こえるか聞こえないくらいの小さな声でボソツと言う。

「エッ？」

右耳に手を当てて、聞こえないと言ったジェスチャーをする少女。

「聖夜だよ！聖なる夜と書いてセイヤだッ！」

それを聞いた星空はニコツと笑い、

「いい名前ですね。ロマンチックです」と言ってくれた。

「そうかな。なんか照れるな」

僕の気にしすぎだったかもしれない。

この名前のせいで幼い時に少し苦労した。今思うとそんなに気にするようなことじゃなかったかもしれない。

けど無意識に名前の部分だけ伏せてしまう癖がある。

少し神経質になりすぎていたんだ。

褒められたらなんか気が楽になった気がする。

僕は、そのまま歩きながら話す。

そんな話をしていると、今度は少女に、

「そうだ。クイズしても良いですか？」

と聞かれた。

「ああ、別にかまわないよ」

何でいきなりクイズなんかするんだと思ったけど、まだ高校生の女の子だ。遊びたい年頃なんだろうと納得した。

星空は空気をスウと胸の奥まで吸い込む

「では問題いきます。偉い人がラスベガスやマカオ、シンガポールで会社の金を使い込んだことが原因で、トイレットペーパーの芯が太くなり実質的な紙の量が減った（消費者の負担が増えた）会社と言えばエリエールですが、八十年代の少年漫画誌でギリシャ神話をモチーフとした、車田正美先生による傑作漫画の名前は、聖闘士ツ…何でしょうか？」

「……………」

僕はあっけに取られた。

そして、息もつかせぬ間に、

「ブ　　ッ。時間切れー。正解はセイヤでしたー。っー
かなんですかその名前。田舎の売れないホストですか？オモシロすぎて、私ペガサス流星拳打てそうなんですけど！ププツ…アハハハハハ」

と言う。

「……アハハ、おもしろいですか…それは良かった。ところで問題にあったエリエールの話、聖闘士星矢と全く関係ないよね。それとエリエールは商品名であって会社名ではないよ」

ムカつく。

なんてムカつくガキだ。

が、

相手は高校生、まだ子供だ。落ち着いた対応をしないとイケない。大学生としてふさわしい大人としての行動を。

見せてやろう、これから社会人になる人間の知恵を。

示そう、人生の先輩としての模範を。

例えば、「高校生活は、楽しいかい？」とか「今日は大学見学に来たのかい？」とか聞けばいいんだよな。

それで間違いないよな。

まずはこんな質問でお茶を濁す。

「ところで君は何処の高校に通っているの？」

「フハハハ、アハハハハ ツ。アハハハハハハハ ツ

！！」

「……………」

全く聞いてねえ。

目の前にはアスファルトの路面に背中から転がり、腹を抱え大笑
いする少女。

ああ、これが腹を抱えて笑うってことなんだな。

そのもつともなる例を見た気がする。

さらに彼女は大笑いしながら、先程問題にもなった、不朽の名作
である少年漫画のオープニングを歌っていた。

アニメの主題歌を歌う行為を見て、相当馬鹿にされていることを
確信した。

どうやら気を使う必要はなかったらしい。

今日、僕は会ったばかりの女の子に自分の名前を大爆笑された。

なんて失礼なヤツだ。

「フヒー、フヒー、苦しい。マジで苦しい。ちょっと聖夜、あん
まり私を笑わせないで下さい」

「面白いことを言った記憶が全くないのだけれど…。っーかかい
きなり下の名前かよ」

「親しみを込めてです。私のことも星空でかまいませんよ」

「親しみって言うより悪意しか感じないぜ。星空」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1598z/>

ホシノソラ Mirror set against each other

2011年12月5日20時09分発行